

## 震災雑感

久留正海

(横浜市消防局長)

このたびの震災が発生してから、本市の消防体制や地震対策について、さまざまな角度からの質問、意見、要望を頂いている毎日で、まさに地震一色の日々を過ごしている。

あのような災害に対応するためには「どれだけの消防力があれば良いのか」と聞かれても、自信を持って答えられない“もどかしさ”を感じてならない。

本市では2010年を目標として、総合的な防災対策の推進と安全・安心都市の実現を目指して、種々の施策・事業を推進しているが、消防力の整備目標について「それで充分かと云われると、これもまた明確に答えることが難しい。

本市の消防力の整備計画については、消防力の某準を意識しながら本市の特性を加味して自標水準を設定しているが、今回の災害に直面し、このような災害を想定した整備計画はどう考えれば良いのだろうか。

同時炎上火災136件、焼失棟数26万2千棟、死者5千6百人、消火せん使用不能と想定している本市地域防災計画(見直しの予定)があるが、これに基づいて目標水準を設定したとしても、大災害時の消防体制は「これで充分」とは言い切れるものでなく、「その時の現有消防力をもって、最悪の事態に備える」としか言いようがない。

都市の災害対応力は、消防力のみで担保出来るものではなく、職員の増員、財政事情など厳しい状況の中で、常に「最悪の事態」に備えている消防の「力」を最大限に発揮させることが出来るように、都市の環境・条件の整備および住民の防災意識の向上を図ることが大切であって、これらの問題を論外にして、消防力の多寡のみをもって都市の災害対応力を議論すべきではない。

ところで、関東大震災の頃とは格段に進歩した科学技術により、都市機能も市民生活も高度化され、その利便性に依存しきっている今日、消防資機材も著しく近代化・科学化されている。しかしながら、これらの利便性、効率性が十分に機能出来なくなった場合は、何をもって補完すべきであろうか。

今回の災害の発生直後から一連の過程を見聞すると、例えば鋸、金でこ、掛矢等の道具の有効性が再認識されている。

消防の科学化は、勿論必要なことであるが、装備・資機材の整備にあたっては、効率性、省力化を重視する余りこのようなものまでも排除すべきでなく、むしろ災害時には、これらのものが有効かつ迅速に活用し得る手軽な手段となることから、科学化と同時にこれらのものの大量配備と積極的な活用をも考えて置く必要がある。

「人間は、たまに来ることや、はじめて遭遇することに備えるのが難しい」のであるから、尚更、人間の長い間の経験と知恵によって、古来から伝承され慣れ親しんでいる、最も単純で誰もが何処でも簡単に使用出来る日用道具的なものの必要性を痛感している今日この頃である。

いずれにしても「災害は忘れた頃にやってくる」のではなく、あらゆる面において、過去の経験や記憶を忘れないようにしてこそ、都市の安全が図られ進歩するものであることを心に止めたい。